

## 明倫短期大学学会 月例研究会報告

平成25年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成25年4月25日の第61回から10月24日の第66回まで計6回が開催された11年に及ぶ66回の研究会における総演題数は125を数えた（通算回数は前進の明倫短期大学研究会からのカウント）。暦年の演題名等は学会HPを参照されたい。

第61回（通算第144回）：2013年4月25日（木）

（座長：本間和代）

### アメリカ海外歯科事情 ～視察報告 in シアトル～

#### 大手ラボにおける完全CAD/CAM化、 コンピュータによる生産管理、完全分業化

木暮ミカ（歯科技工士学科、現歯科衛生士学科）

米国でも歯科技工の世界にデジタル化、工業化の波が押し寄せてきており、産業構造が大きく変わりつつある。従来の小さなラボは、規模や資本の大きいラボによって買収もしくは吸収され、着実に減少している。

また、デジタル化は技工に携わる人に要求するスキルを大きく変えてしまっている。シアトルのラボで働いている人材は、低付加価値を担当する低コストの人材、コンピューター操作をする人材、そして高いスキルレベルが必要とされるような作業をする人材に分けられており、低コストの人材には中南米の出身者がかなり多くの割合を占めている。ポーセラレンワークをはじめとする高付加価値の人材も必要とされているものの、米国全体のマーケットの傾向（大して質にこだわらない）や材料の変化に伴って、このパイも縮小している。

技工士学校を卒業した日本人が米国で技術者として活躍するには、必要とされるスキルを有すると同時に、労働者として価格競争力があることが必須条件であるが、日本人の生活レベルと感覚では低付加価値の労働分野で中南米の人と競争することは難しいと思われる。

ただし、比較的高付加価値のものができて、給与水準がそれなりであれば、活路は見出せるとも言える。

いずれにしても、歯科医療従事者は短期間でも良いので海外に出て経験を積むことで、世界的な視点で自分の置かれている状況を認識する必要があると思われる。

### 歯科衛生士学科入学時の基礎学力は 学習効果に影響を与えるか

山田隆文（歯科衛生士学科）

歯科衛生士学科では入学オリエンテーション時に、数学・国語力の基礎学力調査を実施している。歯科衛生士学科では国家試験の突破が最終目標であるため、3年間の学力の伸びについて、入学時の学力がどの程度影響するかを検討を行った。高校偏差値、評点は明らかな相関はなかった。しかし、入学時の数学力、特に、パーセントの計算問題の理解度が、学力の伸び、国家試験の結果にもっとも強い関係性を示した。実際には、卒業試験・国家試験に不合格であった学生は、全員がパーセント問題が解けなかった。パーセント計算は小学校の5年生で学ぶ。パーセントを理解するためには、論理的な思考能力が必要であり、小学校で理解しないまま中学校、高校を経て短期大学に入学をした。そのため、丸暗記で乗り切ってきたこれまでの試験とは違い、総合的で論理的な思考を必要とする歯科医療知識への理解力が不十分で、基礎学力が不足のまま進級してしまったことで、その後の学力が伸びなかったと考察される。今後、リメディアル教育のあり方について検討が必要である。

第62回（通算第145回）：2013年5月23日（木）

（座長：植木一範）

### 学習のつまずきと歯科技工教育

丸山 満（歯科技工士学科）

歯科技工実習の実習指導は重要である。実習内容の理解に至るまで複数回、もしくは個別指導が必要な学生もいる。内容を十分に理解できないまま実習を開始する学生は、学習のつまずきに発展する可能性も否めない。